

日本

ハンザキ研究所 ニュース 2007(04): 通巻15号

発行 2007. 4. 30

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川 292

TEL/FAX (079) 679-2939

日本ハンザキ研究所 栃本 武良

アンコ淵 “黒主” の年間行動 ②

4月22日午前5時、ハンザキ橋直下の浅瀬にジッとしている黒主を1年ぶりに採捕し測定する。1年前の全長が99㎝だったので1㎝を越えただろうかと期待したが99㎝のままであり、体重も5.90kgと全く変化がなかった。この一年はアンコ淵から離れることもなく、繁殖期にも他所からオス3とメス1が集まり推測にすぎないが、他のオスを咬み散らして自分の遺伝子を残すことにも成功したようだ。この巨体を一年の間、維持するにはどのくらいの餌を食う必要があったのか分からないが、繁殖へのエネルギーも多大なものがあっただろう。ただ、心配なのは巣穴の出入口が黒主の頭部一杯なことである。そこは、水深も周辺と比べて深く渇水時でも1.5mの深さがあり、カワムツやタカハヤ、ムギツクそしてイシガメまでも集中する場所であることだ。朝の8時から夕方4時まで穴から頭だけを出していたこともあり、イシガメがニアミスしたりアマゴが食われそうになったりしていた。この状況を見ていると井伏鱒二の山椒魚を思わずにいられない。うっかり育ちすぎて岩穴から出ることができなくなった呑気なハンザキの話である。

私は、「オオサンショウウオの一夜の行動範囲は？」という質問に対して「究極の巣穴は井伏だ」と答えてきた。昼間の休息の場と夜間の餌の狩場との距離はサラリーマンの通勤時間と同じようなものと考えているからだ。つまり、餌の狩場が近ければ近いほど定住性が高まると思っているからで、居食いでできる井伏の巣穴が理想なのだと考えている。アンコ淵の黒主もそれに近い状況にあるように思えて、出れなくなったらどうしようかと入れなくなったら他所へ行ってしまわないかと本気で心配しているのです。

それにしても、黒主の行動はいい加減なものだと思う。呼吸間隔についても質問が多いのですが、定期的に呼吸してくれるのならば観察も楽なものなのですがそうはいかないのです。河底の大岩の下にある巣穴ですから、巣穴の中では空気を吸うことは出来ないはず。河川の上流域の酸素の十分に溶け込んだ水から皮膚呼吸で酸素を得ていると考えられます。穴から出てきてすぐに浅瀬に向かい空気を吸うこともありますが、その辺を一回りして穴に戻ることもあるのです。一体、何を考えているのかとも思いますが外出が餌取り行動に限られるのかどうかといったことも含めて今後の大きな研究課題だと思います。幸運な方は、ハンザキ橋の上から黒主を見て感激していますがサービス精神でしょうか？

オオサンショウウオ“安口ルート”を求めて(5) — ハザコ、ハゼクイ他

NPO 法人 地域再生研究センター会員
日本ハンザキ研究所 研究員 池上 優一

今回は、ハジカミから派生したという説もある、オオサンショウウオの呼び名の一つであるハザコ、ハゼクイ等について、触れてみたいと思います。

まず、石川千代松(1903)「ハンザキ調査報告書」の中では、「・・・伊賀、伊勢ニテハ之レヲはぜこい又ハはぜくいと云フ・・・」とあり、「・・・はぜこい又ハはぜくいは或ハ溪水ニ産スルはぜ魚(沙魚)ヲ食フト云フ意ナランカ・・・」と解説しています。

また、昭和5年の岡山県編纂「岡山県下ニ産スル特殊動物並ニ該動物ニ関スル研究論文目録」の中の「1. 名称」の説明で方言についても触れ、「此動物ニ対スル方言、俗称亦少カラズ はんざき(岡山、広島、三重、奈良等ノ諸県)、はんざけ(岡山及広島両県)、あんこ(兵庫県又岡山県ニテモ稀ニ)、はぜくい(三重県)、はじっくい(同前)、はじくい(同前)、はざこ(岐阜県)、あんごう(丹後、小野蘭山)、かいまんりゅう(富山、見世物師の称呼)、せんぐわんむし(新潟県)」とあります。

さらに、佐藤井岐雄(1943)「日本産有尾類総説」では、オホサンセウヲの生態の項で、地方名について、「ハンザケ(美作、伯耆、出雲、備中、備後、石見)、ハザコ(美濃)、アンコ(播磨、丹後、丹波)、アンコー(丹波、丹後、美作、伯耆、出雲、備中、備後)、ハジッコイ又はハジックイ、ハジコイ、ハゼコイ、ハゼッコイ(伊賀、伊勢、大和)、ハダカス(丹波、丹後、美作、豊前)、ハジカミ(九州)」とかなり詳しく示しており、この中のハザコという名はその食性に関係するとして、「・・・大山椒魚は貪欲な動物で、随分飽食するばかりでなく以上に挙げた食物の外にも口元に来たものはその何たるかを問わず一たんはとり入れて嚙下するものである。こんな習性を見てのことであろうか、この動物をハザコと呼ぶ地方がある。ハザコとは稲の刈入れ後、麦作のために田に鋤を入れて作られた畝と畝との間のことで、ここへは肥料となるものなら何でもほうりこまれる。大山椒魚が如何に貪欲とはいえ、それほど何でもかでも消化し去るものではむろんないのであるが、かような方言が出るくらい、口元へ来たものはいったんとり入れる・・・」と述べています。

平成18年大分県宇佐市院内町で開催された「オオサンショウウオの会」で、鳥取大学大学院の岡田純氏が人の住まない山間部と民家近くのオオサンショウウオの食性の研究について発表しましたが、胃の内容物の集計結果を見る限り、目の前に来た物は何でも食ってしまう(残飯やラップさらにはアルミホイルまで)という痛ましさも訴えるものでもあり、ハザコ方言の謂れを物語るものにしても複雑な心境となります。

上記方言の中で、ハゼクイやハジックイさらにハザコについて、現在確認では各一説ずつ出てきました。さらに、岡山県編纂の前出資料に出てくる、「せんぐわんむし」と「かいまんりゅう」について、まず、前者から触れたいと思います。

本調査を進めるにあたって、小原二郎(1985)「大山椒魚」(株どうぶつ社)及び、碓井益雄(1993)「イモリと山椒魚の博物誌」(工作舎)が大変参考になっています。これらの本が無かったら、ここまでの調査は進められなかったと思います。

「せんぐわんむし」については、「イモリと山椒魚の博物誌」の中に詳しく書かれています。著者は「第四章 小さな山椒魚たち」の中で、江戸中～後期に出版された、節用、本草、文学等の書物を引用し述べています。小野蘭山の「重修本草綱目啓蒙(本草綱目啓蒙)」(1802年)「・・・越後高田ニテセングハンムシト呼ブ、・・・小兒ノ疳ヲ治スト云フ、」も紹介していますし、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の中の「・・・箱根の山の街道に甘酒売りやさんしょうおの名所が多い・・・」という文も紹介しています。

また、興味あるのは、小原蘭峽の著した「桃洞遺筆」(1850年)の引用で、「又山生魚とも書す。諸州に産す。特に相模箱根山に多く産して、名物となれるを見て、世に箱根の山椒魚といふ。・・・夏月湖水又溪澗中に居り、冬月は陸上に上り、石間或いは落葉下に竄る。形状龍盤魚(イモリ)に似て大き三四寸(約10センチメートル)(土佐には、六七寸のものありといふ)、頭円く蝦蟇の如く、全身泥鰌に似たり。・・・雄は腹瘦、雌は腹肥ゆ、箱根より乾腊にして四方へ出す。小兒の疳蟲を治す。」と書かれています。

これらの引用の要点は、「小型のサンショウウオは、子供の疳の蟲に効く妙薬であり、特に箱根サンショウウオがよく効き、その捕り方、他の効用、生のまま子供に飲ませる事」などいずれも同様の記載です。また、「第三節 千貫虫」の項で、「・・・セングハンムシは千貫虫で、そのいわれについては、佐藤成裕『中陸漫録』(1825年)・・・に次のような千貫虫の説明がある。」と述べ、「又奥州、羽州の山溪に生ず。長さ二三寸の虫あり。その形、即箱根に出る山椒の魚と云うものゝ小なるものなり。土地の人生きたるまゝ呑みて、癩の病根を切ると云。其価は千貫に向ふと云。故に名づくなり。・・・」とあり、この中で、小型のサンショウウオ類の燻製や焼き物、乾物の粉は肺の病の薬、強壯剤で、幼生は子供の疳の虫に良く効くが、その値段が結構高く、千貫にも値する虫、すなわち千貫虫であるということを述べています。ちなみに、江戸期の貨幣価値ですが、現在と比較すると、1文が約10円、1000文が一貫で約1万円です。従って、千貫は約1000万円となり、実際にはこんなに高いはずは無く、高いという例えで用いられたと想像されます。

結局、オオサンショウウオとは離れ、小型のサンショウウオ類のことを言っていることになります。江戸後期にはサンショウウオの大型のものと小型のものが、かなり明確に識別されてきている様子がうかがえます。

最後に、「かいまんりゅう(富山、見世物師の称呼)」についてですが、過去の文献のどこに出てきているのか解りません。ただ、小原二郎著の「大山椒魚」の中に、「実物の生きたオオサンショウウオを広く公衆に展示して見せる試みは、いわゆる見世物として古くからあったと想像されるが、このような“興業”に関する記録は明らかではない。・・・1872年に・・・文部省が湯島の聖堂で開催した博覧会がある。・・・その情景は、上野益三の「日本博物学史」の巻頭にある折込図版でうかがうことができる。」と述べ、前出の「大山椒魚」の本の表紙カバーに用いられています。見世物師の呼称の「かいまんりゅう」の語源については、私の独断的推測では、ウナギのことを海鰻鱺と書いている「(家伝)日用本草」や「庖厨備用倭名本草」などの書物があり、鰻鱺魚がオオサンショウウオのことを言っていた時代もあることから、何か関係あるのではないかと考えています。

(続く)

ハンザキ研の各種活動紹介と参加について

①日本ハンザキ研究所の研究者登録について

ハンザキ研ニュース№11で“安口ルート”を求めて(1)を書かれた池上さんから、「研究員」という肩書を使ってもいいかという質問があった。私自身も将来的にこの研究所が本格的に動き出すようになったならば、一人だけでの働きでは高が知れているので、研究員という形での組織化を考えていたところだったので、登録第1号となっていただいた。

今のところは何の規約も責任も無いが、まあ当面はハン研ニュースへの寄稿くらいを義務として発足したいと考えていますので、関心のある方は登録してください。

②ハンザキ研究所ニュースの定期講読について

ハンザキ研ニュースは、何とか月刊で発行していきたい、タイムリーな発信を行いたいと頑張っているところです。生野町内の主だった場所へニュース・ファイルを20か所ほど置いていただいています。JR生野駅・生野郵便局・生野支所・生野公民館・民宿のせせらぎ荘や孝ちゃんとやまびこ山荘・魚ヶ滝荘・黒川学習センター・黒川温泉などです。ある所ではファイルが行方不明になったとのことで、読みたい方がそんなにいるのならと、定期講読の案内をしました。毎号の送付を希望される方から、3号分と半年分とに分けての受付をする事にしました。嬉しいことに神戸市内の方から早速申込みがありました。コピー代と送料で一号分が170円かかります。12月分を一単位として申し込んでください。

③NPO法人地域再生研究センターへの協賛について

私が旧・生野町立黒川小学校の施設を借用しハンザキ研を立ち上げたのは2005年の事でした。姫路市立水族館を退任して、人生のロス・タイムをオオサンショウウオの調査に費やすべく、その基地を求めてたどり着いた所には教員宿舎が待ち受けていたのでした。教室の片隅に調査用具を置かせてもらいたいだけの考えから、ここをベースに生態調査を行いつつ、校舎の活用を考えていこうと考えるようになりました。しかし、生活空間としての宿舎ですがライフラインが切れていたのも、その復旧にはかなりの資金が必要であり、当法人の全面的なバックアップによって、動き出すことが出来ました。NPO法人のことで、基盤となる資金は協賛していただける団体や個人の有無に頼らねばなりません。

お世話になった法人の活動への全面的な協力をオオサンショウウオをメインにした環境学習活動で答えています。将来的にはハンザキ研もNPO法人として独立して活動が出来るようにしたいと考えています。無論、地域再生研究センターや地元の黒川地域活性化協議会との関係も互いに良い状態で進めなくてはなりません。私の活動が少しでも限界の村である当地の活性化に力をお貸しできれば幸いと考えています。開所以来20か月ですが、来訪者も1500人を越えて、生野町黒川の名を高めるのに少しは役立ったのかなと考えています。



写真1 山道の横にある水溜りのヒキガエル卵



写真2 ハンザキ研の新しい正門



写真3 収穫した大判シイタケ



写真4 周囲の石が流された人工巣穴No.4



写真—5 方言ハザコのマスコット「はざ吉くん」(岐阜県郡上市和良町観光協会ホームページより)



写真—6 民家近くに棲むオオサンショウウオの胃の内容物に、ブリの骨やラップ等が。(写真提供 岡田純氏)

ハンザキ研日誌 2007年4月

- 1日：3月30日から引き続きオオサンショウウオ調査(GS-235.～26日)
：兵庫県生物学会・前田副会長他11名来所
：兵庫県自然保護協会・大沼理事と川上さん来所
：梅ヶ畑にてヒキガエルの産卵場確認
- 2日：神戸学園・教諭一行10名来所
- 3日：オオサンショウウオの会、最年少の秋道優真君(小学6年)滋賀県より来所
- 4日：降雷と晴天が交互に一日中
- 5日：正門をハンザキ橋の位置にまで移動工事
- 8日：産経新聞豊岡支局長・谷下記者ツチノコ・ハンザキの取材
- 13日：研究所周囲のシカ排除柵完成
- 14日：アンコ淵横の落ち葉溜まりから、昨年の幼生1個体確認
- 17日：関西テレビ、ツチノコ・オオサンショウウオ取材
- 18日：簾野の人工巣穴の改善工事確認
- 19日：シイタケ初収穫する、手のひら大をステーキとする
- 20日：長野県短期大学の嶋津武先生夫妻、オオサンショウウオの寄生虫調査に～22日
- 22日：簾野の人工巣穴の改善工事の改良を試みる
- 24日：国交省豊岡河川国道事務所より出石川の打合せに来所
：姫路市立水族館・調査(GS-236)で清水・多田両氏来所
：前・名古屋港水族館飼育係・小林清重さん来所
- 25日：兵庫県豊岡土木事務所より、オオサンショウウオの原状復帰について来所
- 26日：先月より28日間の滞在長期記録(これまでは15日が最長)帰姫路
- 27日：大阪府安威川ダム会議
(今月は1回26日間の出勤?で、総計148人の利用がありました)
-

ハンザキ所長のツブヤ記録

ヒキガエル産卵の季節だ。故郷(東京都立川市・標高100m)では、3月に入ると庭に作った小さな池に毎年のようにグワ!グワ!というような鳴き声が聞こえはじめては、大量の紐状の卵が産みだされていた。故郷を離れて40数年になるが、今でも僅か150坪程の庭に住み着いているヒキ君が産卵を続けていると兄が言う。ガマガエルと呼んでいたが、兵庫県ではオンビキが一般的な呼び名のようだ。カエル合戦のスターたちも、最近ではその姿が少なくなってしまったという。ハンザキ研の川向こうの国道でも時々ではあるが、自動車にひき殺された死体を拾っている。生きにくい世と嘆いていることだろう。